

高橋栄子（編著） 柏木正好，他（著）

環境適応 実践実技ノート 中枢神経系障害への知覚探索アプローチ

樋口 貴広
（東京都立大学，教授）



巧みな運動の原理を理解するためには、運動を「身体の振る舞い」という単位で捉えるのではなく、「身体と環境の相互作用」として捉えるべきだという発想がある。速く走るためには、よいフォームであるか（身体の振る舞い）ということ以上に、正しく地面をとらえているか（身体と環境の相互作用）のほうが直接的なインパクトがあることは、身体と環境の相互作用に着目する意義の好例であろう。本書は、身体と環境の相互作用にいち早く着目し、中枢神経損傷者に対するリハに実践応用してきた、環境適応講習会の実技内容を1冊の本にまとめたものである。

本書は、講習会の中心人物である柏木正好氏による概説から始まる。続けて、4つのテーマ（平面適応・移動空間、洗体・更衣、アクティビティ、食事）に対するアプローチの総論、ならびに具体的な実践事例が紹介されている。執筆者は実に46名にも及ぶ。編著者の高橋栄子氏のご努力のもと、これだけ多くの執筆者となっても、本として統一的なメッセージを読み取ることができる。その一方、各執筆者は実践者として多様なケースに携わっており、そうした経験を通してこそ知り得た独自の想いを、丁寧言葉にしている。各執筆者が示すメッセージの共通

性やわずかな差異から、環境適応講習会における重要な理念、ならびに理念が臨床に落とし込むことのリアリティについて、さまざまな情報を得ることができる。

柏木氏は概説において、中枢神経損傷者の問題の一つを、“定型的な姿勢・運動パターンに閉じこもっている”ことと捉えている。そのうえで、固定的な姿勢・運動パターンから脱却させるためには、患者が能動的に環境を探索できる状況をつくり出すべきだと主張している。たとえば、洗体、更衣、食事等でも基本となる、立位・座位・背臥位時における身体と環境の支持面に着目すると、固定的な姿勢・運動パターンの際は支持面が不適応的に狭くなる。この場合、支持面を広げる工夫をセラピストが施すことで、姿勢・運動パターンが変化できる体制を整える。こうすることで、おのずと広い支持面を探索するような動きが引き出され、結果的に自律的・適応的な姿勢・運動パターンへと振る舞いが変化することが想定されている。

変動的・適応的な振る舞いを通して身体と環境とがインタラクションし、最適な状況を探索するという発想は、生態心理学という研究領域の主張でもある。その創始者である James J. Gibson は、

動物と環境の相互作用を研究する生態学の発想を導入することで、伝統的な基礎科学の考え方は著しく異なる運動制御・学習の理論を展開した。柏木氏の概説は、おおむね生態心理学の考え方と類似しており、脳科学・認知科学のような、いわゆる要素還元主義的な基礎科学をエビデンスとするリハとは、一定の距離を置いていることがうかがえる。

これに対して、4つのテーマにおける執筆の中には、より柔軟なかたちで、環境適応講習会の考え方を基礎科学の知識に結びつけようとする試みも見受けられる。実際、生態心理学における中心概念であるアフォーダンス（行為の決定にかかわる環境の性質のこと）の知覚は、認知科学領域においても情報処理の一つの要素として組み込まれることも多い。実践を根拠づけ得る基礎研究の模索も、いわば探索的な振る舞いとして、環境適応講習会の今後の発展に寄与するように思われる。このような観点で内容に触れるのも、多くのセラピストが執筆者となっている本書の楽しみ方の一つであろう。

B5判 312頁 4,200円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357